

論文内容要旨

論文題目

Perception of anesthesia safety and postoperative symptoms among abdominal surgery patients at the University Medical Center in Ho Chi Minh City, Vietnam

(ベトナム・ホーチミン市医科薬科大学附属医療センターにおける腹部外科患者の麻酔安心感・周術期の臨床的経過についての臨床疫学研究)

責任分野： 公衆衛生・予防医学分野

氏名：副島 久美子

【内容要旨】

背景・目的：麻酔・疼痛管理の質の向上には患者側からの評価が不可欠であり、先進国では、臨床指標と共に患者の主観的指標を含めた周術期医療サービスの評価が増加している。ベトナムでは急速な経済成長の中、医療分野でも欧米式の治療方針や設備が導入され始め、医療に対する人々の意識も変化している。医療従事者間でも患者主体の医療サービスについての認識が高まっているが、これに関する臨床疫学研究は乏しい。本研究はホーチミン市における消化器外科手術患者の周術期管理の現状について明らかにする事を目的とした。

方法：2006年10月から2007年2月の期間に、ホーチミン市医科薬科大学医療センターで消化器外科手術を受けた16歳以上の患者で、調査に同意した180名を対象とした。対象者の経過は、術中から術後24時間まで追跡した。調査には麻酔科医、回復室医師及び看護師、患者を対象とした3部の質問票を用いて、患者基本属性、術中・術後状態、痛みやケアに対する対象者から評価などについて情報を収集した。分析には多変量ロジスティック回帰分析を用い、麻酔の安心感、術後症状、術後創部痛に関する5つの転帰の関連要因を分析した。

結果：硬膜外麻酔処置では17.2%に支障があり、最も頻度が多かったのは4回以上の穿刺(13.3%)であった。67.2%の患者に術中・術後に合併症が見られ、そのうち循環器合併症が最も多かった(58.9%)。麻酔の安心感が「非常に高い」と答えた群(38.9%)と「高い」と答えた群(58.3%)の比較では、麻酔の不安が増す事に関連する項目は、麻酔の術前説明への満足度が低い、家族との関わりへの満足度が低い、そして、術中・術後合併症がない事であった。術後症状数が3つ以上ある患者は59%であり、その関連要因は3時間以上の手術時間であった。痛みに関する転帰については、術後2時間での強い創部痛は25%に見られ、有意な関連要因は性別が男性と手術方法が開腹手術である事であった。術後2時間から24時間にかけて痛みが軽減しなかった患者は51%おり、女性に有意に多かった。さらに、痛みが予想と同程度または予想以上と回答したのは46.1%で、100ml以上の出血量と医療者とのコミュニケーションの満足度が低い事が関連していた。

考察：麻酔安心感や術後疼痛など患者の主観的な周術期管理の評価には、合併症の有無、手術時間、術式、出血量など医学的な要因に加えて、性別や医療従事者や家族との関係が強く影響していた。周術期における患者主体の医療サービス向上のためには、臨床的な対処に加えて、患者とのコミュニケーションや患者と家族との関わりに十分に配慮し、特に痛み治療においては性差を考慮することが重要であることが示唆された。

平成 20 年 1 月 8 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

副島 久美子

申請者氏名 : Perception of anesthesia safety and postoperative symptoms among abdominal surgery patients at the University

論文題目 : Medical Center in Ho Chi Minh City, Vietnam (ベトナム・ホーチミン市医科薬科大学付属医療センターにおける腹部外科患者の麻酔安心感・周術期の臨床的経過についての臨床疫学研究)

審査委員 : 主審査委員

木村 理



副審査委員

久保田 功



副審査委員

石井 邦明



審査終了日 : 平成 19 年 12 月 27 日

【 論文審査結果要旨 】

副島久美子氏は以下について説明した。

背景・目的 : 麻酔・疼痛管理の質の向上には患者側からの評価が不可欠であり、先進国では、臨床指標と共に患者の主観的指標を含めた周術期医療サービスの評価が増加している。ベトナムでは急速な経済成長の中、医療分野でも欧米式の治療方針や設備が導入され始め、医療に対する人々の意識も変化している。医療従事者間でも患者主体の医療サービスについての認識が高まっているが、これに関する臨床疫学研究は乏しい。本研究はホーチミン市における消化器外科手術患者の周術期管理の現状について明らかにする事を目的とした。方法 : 2006 年 10 月から 2007 年 2 月の期間に、ホーチミン市医科薬科大学医療センターで消化器外科手術を受けた 16 歳以上の患者で、調査に同意した 180 名を対象とした。対象者の経過は、術中から術後 24 時間まで追跡した。調査には麻酔科医、回復室医師及び看護師、患者を対象とした 3 部の質問票を用いて、患者基本属性、術中・術後状態、痛みやケアに対する対象者から評価などについて情報を収集した。分析には多変量ロジスティック回帰分析を用い、麻酔の安心感、術後症状、術後創部痛に関する 5 つの転帰の関連要因を分析した。結果 : 硬膜外麻酔処置では 17.2% に支障があり、最も頻度が多かったのは 4 回以上の穿刺 (13.3%) であった。67.2% の患者に術中・術後に合併症が見られ、そのうち循環器合併症が最も多かった (58.9%)。麻酔の安心感が「非常に高い」と答えた群 (38.9%) と「高い」と答えた群 (58.3%) の比較では、麻酔の不安が増す事に関連する項目は、麻酔の術前説明への満足度が低い、家族との関わりへの満足度が低い、そして、術中・術後合併症がない事であった。術後症状数が 3 つ以上ある患者は 59% であり、その関連要因は 3 時間以上の手術時間であった。痛みに関する転帰については、術後 2 時間での強い創部痛は 25% に見られ、有意な関連要因は性別が男性と手術方法が開腹手術である事であった。術後 2 時間から 24 時間にかけて痛みが軽減しなかった患者は 51% おり、女性に有意に多かった。さらに、痛みが予想と同程度または予想以上と回答したのは 46.1% で、100ml 以上の出血量と医療者とのコミュニケーションの満足度が低い事が関連していた。考察 : 麻酔安心感や術後疼痛など患者の主観的な周術期管理の評価には、合併症の有無、手術時間、術式、出血量など医学的な要因に加えて、性別や医療従事者や家族との関係が強く影響していた。周術期における患者主体の医療サービス向上のためには、臨床的な対処に加えて、患者とのコミュニケーションや患者と家族との関わりに十分に配慮し、特に痛み治療においては性差を考慮することが重要であることが示唆された。以上の点につき①本人が担った役割、②ベトナムでやった理由、③日、欧米との比較等の文献的考察、④recovery room には 24hr は患者は全員はいり、家族は患者が呼んで欲しいといった時だけ入る、等の説明追加すれば本研究が博士(医学)に値するものと判断した。